

# 「広島」の教訓

法学部国際関係講座研究生

イオン・ヴィシヨージュ



## 生きる意志

私が広島大学で勉強を始めたころの一番強い印象のひとつは、原爆資料館に関するものであった。もちろん、広島に原爆が落とされたということは小学校のころから教えられてきたが、実際自分でその事実を見ることは非常に衝撃的な体験であった。資料館の中で過ごした三十分間の恐ろしい経験は、今も忘れることができない。「何千年という人間文明の意味は何だったのだろうか、どうして科学の一番の成果がそんなひどい目的に奉仕することになったのか」という思いに悩まされた。やはり人間は未来がない、人間は自殺的である。発達不十分な動物なのかもしれない。私の友人の言葉を思い出した。「ベートーベンのもとでも戦争が続いていることを見ると文化はやはり要らないものだろう。進歩がどこにあると言うのだ」。

でも、資料館を出て、最初に目に入ったのは外で遊んでいる小学生であった。そして、平和公園の回りの、新しい広島の美しい姿。

暗い思いはなくなった。やはり、我々は矛盾した生き物である。いくら自殺しようとしても、自分の中のいい部分が勝ってしまう。とりあえず、今までのところは。これが、私が広島から教えてもらった最初の教訓であった。

## 頑張る

第二番目の教訓は、広島の人々についてであった。不死鳥のような町の復活は、広島人の著しい特質や彼らの一生懸命な努力の結果であったといえる。日本では、どこへ行っても、一番目立つ言葉は、「ガンバル」だと思う。けれども、恐ろしい災禍を克服した広島では、この言葉の意味が特別で、もっと深いのだろう。第二番目の教訓というのは、「善」というものは、ひとりで湧いてくるものではなく、人間の善悪を圧倒したり進歩したりするために、一生懸命に頑張らないと結果がでないということである。

## 相手の理解

第三番目の教訓は、相互の理解と尊敬に関する。広島は外国からひどい損害を与えられた。しかし、仕返しや憎しみの代わりにこの町は平和の象徴になった。暴力や狭量やいろいろな差別が充満する世界の中で、広島は国際的な町になる意志がある。広島は、努力することでもう一度、外国の世界について理解しようとしている。闘争の原因の一つは、相手の事についての無知だと思う。広島はこれを避けるための手本である。

## 手本の力

この三つの教訓は、ほかの教えられたすてきなことと共に、広島で過ごした一年ほどの間、私がいつも感じてきたことである。私はルーマニア人である。ルーマニアというのはそれほど大きくなくて（面積は日本の三分の二、人口は二千三百万人）、東欧にある国である。三年前に、この国の政治的な体制を変える革命が起こった。それから、ルーマニア人も、他の諸国民と同じく、新しくして進歩的な社会を築きたいと願ってきた。けれども、それはとても困難で、莫大な努力と時間が必要だと思う。そのような革命のあとでは、いつも経済や社会などの危機が起こって

ルーマニア出身。ブカレスト大学日本語学科卒業。現在、駐日ルーマニア大使館員を休職中。国費留学生として、国際政治を学んでいる。

今日は! BUNĀ ZIUA!

ブーナ・ジューワ

今日は! Alô, como vai

アロ コモ ヴァイ

しまう。

戦前のルーマニアの豊かな生活を思い出し、  
ているルーマニア人は、一九三八年からの国  
王の独裁、そしてその後、共産党の独裁  
を忘れたかと思っている。しかし、そのため  
には、政治的な革命だけでは足りないと思う。  
考え方の革命も要る。前の共産主義の社会で  
は、「政府が個人の代わりに考える」という  
表現があった。その意味は、一人一人が自由  
ではなかったし、自由の代わりに基本的な必  
要物（仕事や教育や医療など）が政府によっ  
て整えられていたということである。そんな

考え方の結果として、今の社会ではいろい  
ろな問題が起こってきた。大勢の人々に、自由  
ということとは重荷になってしまおうのだろう。  
だから、ほかの事より早く、我々の考え方に  
変化が必要だろう。新しい社会のための新し  
い人間関係をつくらなければならぬ。みん  
なの努力、協力、お互いの理解と尊敬がなけ  
れば成功は無理である。  
ルーマニア人は日本の経済的な成功に感服  
している。しかし、そのような成功への道を  
歩むため、最初は全ての国民が広島を教訓を  
理解しなければならぬと思う。

## 日本の国際化

——本当に進んでいるのだろうか……——

工学研究科博士課程前期移動現象工学専攻二年

ポルト・ジェファーンソン

私は日本人と結婚したブラジル人です。ブラ  
ジルのような多民族社会においては、国際  
結婚はふつうのことですが、日本ではまだ少  
し「メズラシイ」ことのようにです。日本の国  
際化につれて、国際結婚は次第にふつうのこ  
とになるだろうと私は考えます。

## 四度目の日本

私は四年半前、ブラジルの私の会社の仕事  
で初めて日本にやってきました。私達はブラ  
ジル北部に新しい化学プラントを建設しよう

としており、技術供与者として三菱化成が選  
ばれていました。私は、三菱からの技術移転  
を任された化学技術者のグループの一員でし  
た。

最初、私は他の二人のブラジル人技術者と  
ともに、美しい倉敷の街で三ヶ月ホテル住ま  
いをしました。そして日本に着いて二週間も  
しないうちに、今は私の妻となることとなっ  
た優子という名前の女性と出会いました。

私はまたそれから二度ほど日本にやってみ  
て、そのうちブラジルに優子をつれて帰りま  
した。しかし、二年半ほど前、私達のプロジェ



私の家族（岩国郊外のレストランで）

一九六五年、ブラジル生まれ。一九八六年、  
リオ・グランデ大学工学部化学工学科卒業。  
ブラジルでの化学会社勤務を経て一九九一年  
広島大学工学部研究生、一九九二年、博士課  
程前期入学。化学熱力学研究室に在籍。

クトは、ブラジルの経済の問題のために延期  
されました。私はこれを以前から暖めていた  
計画を実行に移すよい機会と考えました。そ  
れはもう一度勉強をすることです。私の妻は  
日本人であり、そして彼女の両親は福山市に  
住んでいるので、私は広島大学に来ることに  
決めました。幸い、私を受け入れてくれるこ  
とに同意してくれた親切な先生にめぐりあう  
ことができ、現在私は移動現象工学専攻の博  
士課程前期二年に入ったところです。

## ブラジル